

連載 オブジェクト指向と哲学

第 81 回 時間と空間(15) - mind and matter

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

街を歩いているとコインパーキングが目につきます。何気なく見ると TimeSpace という看板が挙げられています。時空？こんな思いがけないところに時空を発見しました。なるほど駐車場は時空なのかと考え込んでしまいました。この時空では車を置く空間と占有時間が価値となります。

駐車場という空間に注目するなら、駐車スペースに車の生成・消滅が繰り返し替えされる。碁盤の 2 次元空間と似ています。囲碁の対局では順序にのみ意味があり経過時間に意味はない。駐車場では生成・消滅の順序に意味はなく、その間の経過時間に価値がある。

ホテルも同様に捉えることができます。宿泊客がチェックインしチェックアウトするまで部屋が占有されます。ホテルを宿泊客が生成され消滅する空間と見れば、コインパーキングと同じタイプの時空間です。囲碁と将棋なら囲碁型です。(連載第 80 回-囲碁と将棋の時空)

囲碁は置石が生成されたあと必ずしも消滅しませんが、コインパーキングとホテルはそこに生成されたものは必ず消滅します。生成・消滅は対象物の外部空間との間の移動である点は同じで、当然ながら車や人は生成も消滅もしていません。

●物活論

ギリシャ時代、万物にプシュケー (Ψυχή - 心、靈魂) があり、それが物を動かすという物活論 (hylozoism) の考えがありました。(連載第 23 回-遠隔力)

アリストテレスは「心とは何か」[1]で磁石の力について

--

タレスも、人びとが記録しているところからすると、つまり、もしもかれが鉄を動かすという理由で石も心をもつと述べたとするならば、心を何らかの動かすものであると考えていたようだ。

[1]

--

とタレスの物活論に言及しています。

心と身体の関係について

--

心はこのような意味で身体の終局態になっているのか、それとも船頭が船に対してもつ関係になっているのかは不明である。[1]

--

と述べています。終局態については連載第 29 回（メディアを可能態と実現態で考える）で考えましたが、ここでは後半に着目します。心と身体の関係は船頭と船の関係なのか？としています。これは運転手と車の関係です。動かすものと動かされるものの関係です。

●mind and matter

デカルトは物質と精神の 2 元論を唱えた。「我思う故に我あり」の思う我は肉体とは別のところに存在する。人間は肉体と魂からなる。人はこの世に生まれ、やがて死ぬ。生老病死は誰も逃れることはできない。人が避けられないものが 2 つあるとベンジャミン・フランクリンは言った。それは死と税金である。これも現実世界の真理であろう。たとえ死んでも税金は相続税として子孫にまで追いかけてくる。

人の生死を肉体の生成と消滅と考えるのは、この世つまり我々が生活している閉じた 3 次元物質世界レベルの認識にすぎない。魂は不滅であり、認識を超えた別の時空とこの世との間で移動する。肉体と魂が合体している間は地上で活動できる。

車は運転手がいる間走ることができる。車が肉体であり運転手が魂であり、駐車場の車は持ち主が引き取りに来て肉体と魂が合体し、駐車場から運転手の意思にしたがって別空間に移動する。

事故で車が壊れることもある。小さな事故なら修理工場で治る場合もある。大事故で廃車になることもある。運転していた人が無事なら新しい車に乗り換えることができる。

●モデル

人は 3 次元的物質である肉体と 3 次元的に捉えることができない魂からなる。

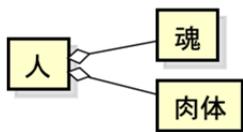


図 81-1 人=肉体+魂

人を魂と肉体として考えるなら、運転手は魂であり車体は肉体です。車は車体を運転手の意思により自由にコントロールすることができる。魂が肉体をコントロールします。

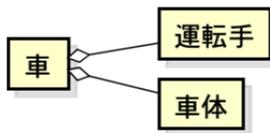


図 81-2 車=車体+運転手

この二つを合成すると、車は運転手の魂がその肉体を通して車体をコントロールするという図式になります。

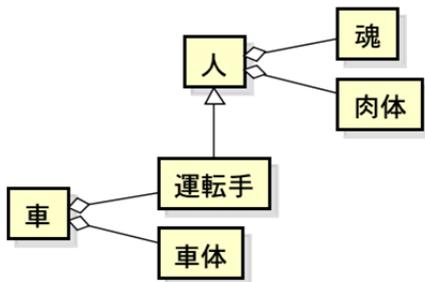


図 81-3 合成モデル

●輪廻転生

生老病死は肉体の話で魂は不滅です。プラトンのパイドンで、ソクラテスは死を前にして肉体の監獄の話をしていきます。(連載第 9 回-想起説、第 58 回-ニュートリノ振動)

ソクラテスは輪廻転生を信じ、自身が毒杯で死ぬときも少しも恐れず、これで自分の魂は肉体の監獄から解放され、すばらしいイデア界(天上界)にやっともどれるのだと信じ、何も悲しむことはないのだとしました。そこを脱して今はどうしているのでしょうか。違う名前でもどこかに生まれ、何を説いていたのでしょうか...

以下次回...

参考書籍

[1]アリストテレス、【訳】桑子敏雄、心とは何か、講談社、1999